

「第 6 回復興検討委員会部会議論内容」

第 1 部会

総論

- ・戻りたい人、戻りたくない人双方の気持ちをもう少し汲み取ってほしい。
- 「帰るため」だけのビジョンではないことを理解してもらえる書きぶりにする工夫が求められる。
- ・住民の意識や現状にビジョンが追いついていない。ギャップ、違和感を覚える。
- ・町民が何を求めているかを把握し、現実に見合ったビジョン・計画を立てるべき。
- ・「コミュニティビジネス」「バイオマス」など、一般人には分かりにくい文章（横文字）が多い。
- ビジョンを補うための説明書のようなものが必要
- ・「一人一人が復興して初めて復興」というのがビジョンの根幹部分だが今のビジョンではそれが伝わってこない。
- ・理念や方向性はみんなだいたい分かっている。
- 必要なのは具体的な情報（詳細な線量マップなど）。

- ・ビジョンの中にも具体的な施策やスケジュール感を示すことが必要。
- ・短期ビジョンの中に復興に向けた具体案がない（特に賠償問題、産業誘致の話）
- ・短期ビジョン中に個人の生活のための施策を盛り込む必要がある。
- ・今の行程では復興計画を作成するまでに時間をかけすぎ。
- ・町の思いを国などにタイミングよく発信できないとビジョンの効果が薄れてしまう。（ex. 区域見直しの話が発表されるタイミング）
- ・本来はビジョンより復興計画を早く議論すべき。理念は大事だがそれは県がやればよい。計画が先がないと町民との意識ギャップが生じる。

町民への情報（線量等）

- ・早く線量マップを作ってほしい。（特に自分の家の線量がどれくらいなのかを知りたい）
- ・細かい線量を早期に示すべき。町民は新聞等でしか情報を得られない。
- ・町として放射能に対するビジョンを反映させるべき。
- ・線量等町の細かい状況が分かるとはじめて町民は帰る・帰らないの判断ができる。
- ・短期ビジョンの中で低線量地域の除染やインフラ復旧を進める旨の記述があるが、本当に戻って大丈夫なのかがよく見えない（放射線による影響、賠償、インフラ復旧の見込み等）

除染

- ・モデル事業の結果では確かに線量が下がるが、山林の除染をどうするのが課題。
- ・浪江の全ての農地を除染するのは不可能。
- ・山から下りてくる水（高瀬川）は本当に大丈夫なのか。
- ・水がなければ生活できない。
- 除染を進める上での考慮すべき点。
- ・常磐線の東側を中心に除染することが重要（役場を拠点にする）

町外での生活

- ・住民は避難先での生活を続けていく気持ちが強い。
- ・現状、仮設住宅などの環境は子供の教育を受ける場としてはふさわしくない。
- ・帰れないことを前提とした対応も必要（帰町のための復興との分けて考える）
- ・長期的に避難するにしても仮設住宅の耐久性の問題がある。
- ・復興公営住宅の話は近い将来議論されるべき。

子供たちのために

- ・国や県に子供の思いがどこまで伝わっているのか疑問。しっかり伝えたい。
- 子供の前向きな気持ちに伝えたい。
- ・子供の一番の悩みは「友だちに会いたい＝絆づくり」
- クラス単位、学校単位での集まりで思いを馳せる機会が必要。
- ・「危険」に対しての教育が大事なのではないか。特に親への教育。＝リスクコミュニケーション
- 地域での放射能に関する勉強会の実施等。
- ・「放射能に対する恐怖のために戻りたいけど戻れない」という思いをどこかに活かさないか……。
- 子供は帰りたいたいと思っても、親は子供を守るために町に戻ろうとしない。歯がゆい思い。
- ・「新しいふるさと」を作るときに子供の思いを活かす。
- ・「今は帰れないけどいつか帰りたい」という声が多いのであれば活かした方がよい。
- そういう意味で子供の声は貴重。
- ・子供に何を残せるかを考えないといけない。（賠償＝お金は使ってしまったら残らない）
- ・ふるさと、浪江のアイデンティティをどう取り戻すか。（ex.自然、伝統文化 etc）
- ・避難して今の環境に慣れつつある中で、浪江でのつながりや絆をどう維持していくか。
- ・漠然としたものではなく具体的なスケジュールや「子供に対してはこうする」という何かを書き込まないとダメ。
- ・原発や原子力、放射能に対する町の基本姿勢を子供に示すためにもビジョンに記載する必要があるのではないか。
- ・P.16「教育環境の再生と学習支援の充実」はもう少し内容を厚くする必要がある。

第6回復興検討委員会部会議論内容 第2部会

総論

- ・復興ビジョンから先の、具体的な内容（復興計画）を議論する段階になってきた。
 - 復興計画策定の前に、住民に“より詳細な意向調査”を行うべきではないか。
 - 「帰る・帰らない」の意見が分かれる中で、まずはニュータウンに転居してから考えるのも一案か。
 - 具体的な表現による「復興像の弱さの露呈」の払拭。
 - ・復興ビジョンが「帰ること」を強要すると捕らえられている。
 - 位置づけとして、町としての信念や理念を前面に出すべきではないか。
 - 「帰る」ことを印象づけるビジョンではなく、多様な選択肢を設けるべきではないか。
 - 絵を用いるなどして、わかりやすい資料にするべきか。（「子ども向け復興ビジョン」の策定など）
 - ・復興計画の進捗管理・事後評価を行う必要がある。
- ・パブリックコメントへの意見が68件だったことは少ないという印象。
 - 資料の量を考えると、年配の方が目を通すのが厳しかったか。
 - ・住民に説明する際は、町長のリーダーシップ・信頼が必要。
 - ・浪江町の住民一人一人が苦勞し、協力していく仕組みが必要。
 - 「戻るにも苦勞」という考えを、住民に共有すべき。
 - 住民に「自分も関わっている」という認識を持たせることも必要。
 - ・浪江町役場へ意見を言える仕組みを構築する。
 - 例えば、広報誌に返信用封筒を付け、意見を言える場を設ける。

町民への情報（線量等）

- ・線量などの情報提供により、住民の不安払拭に繋がる。
 - 現状にあった人の移動（引越し、転居など）も可能となる。

除染

- ・町として最低限の、除染の基準（〇mSV/年などの具体的な数値目標）を示すべき。
- ・警戒区分の見直しにより、町民は「帰らされる」と受け取る者もいる。
 - 町として、「浪江町に住めるようになるまでは住民を住ませない」などの方針を示すべき。
 - ・子どもアンケートでは、「自分が大人になっても除染を続けて欲しい」という意見あり。

町外での生活

- ・帰町を最終目標としつつ、まずは復興公営住宅にてコミュニティを設けるべき。
 - 雇用や営業にも配慮。また、病院などの医療施設なども必要。
 - ・二重の住民登録を可能とし、いつでも「ふるさと なみえ」を感じられるようにする。
 - ・仮設住宅などの環境は子供の勉強部屋を設けられず、教育環境としては十分と言えない。
 - ・期限の定められている仮設住宅や借上げ住宅に入居する住民への不安の払拭。
 - ニュータウン（復興公営住宅）は、浜通りに設置するべきではないか。
 - ・避難民受け入れに対する、各自治体の扱いがバラバラ。（受け入れを拒否するケースも）

子供たちのために

- ・アンケートでは、「浪江に戻りたい」という強い思いがある。
- ・「除染にお金を費やさず、賠償に回して欲しい」と、子どもにまで心配させてしまっている。
- ・子どもの意見を計画につなげていく努力が必要。
- ・県補助事業の広報誌「集い」のような仕組みを継続するべき。
- ・子どもたちの意見を復興ビジョンの冒頭に記載し、想いを伝える方法も一案。

「第6回復興検討委員会部会議論内容」

第3部会

総論

- ・広域的な取り組みとして復興を考えるのは必要不可欠。
→各々の町の復興とは別に、双葉郡全体として、双葉郡をどうしていくかを検討していく動きがでている。
- ・多様な考え方を全て反映させたビジョンにするのは非常に困難だと思う。
→困難であっても、様々な選択肢や可能性はさぐっていくべき。
(町内・町外いずれの復興であったとしてもその姿勢は必要)
- ・「帰るためのビジョン」というふうに読めてしまうのは問題。
→帰るためのビジョンではないことをもっと丁寧に、強く説明すべき。
- ・ビジョンは分かりやすさが一番大事ではないか？
→具体的なことは計画に盛り込んでいくくらいでもよいのではないか？
→子どもたちにも分かりやすいビジョンが必要ではないか？
(副読本のようなものを作成するのも良いかもしれない)
- ・スピーディーな対応を強調して書き込む必要があるのではないか？
- ・いつから復興が始まって、いつから帰れるようになるのか、早急に示さないといつまでも判断できない。
- ・具体的な町の復興像をイラストで示せれば分かりやすいのではないか？
→常磐線より東側を中心に除染し、その後のコンパクトシティやまちづくり像を示せればよいのではないか？
→区域見直しが具体的に示されないと動くのは難しいのではないか？
- ・ふるさとの経済の再生のためにも、復旧・復興による利益は地元還元されるべきではないか？
→地元業者だけでは、早急な復旧・復興は困難。
→迅速な復旧・復興と町の経済の再生、両面をクリアできるような制度や仕組みを考える必要がある。

産業の再生

- ・農林水産業の再生について、厳しさ、困難さを明確にし、その上でどういった取り組みによって再生させていくのか、という書き方は必要。
- ・「産業(特に農林水産業)の再生の可能性はある」ということを改めて書き込む必要があるのではないか？
- ・農林水産業の再生には、夢のある記載が必要。
→同時に実現可能性とのバランスを考慮する必要がある。

子供たちのために

- ・大人が考えるよりも、子どもの気持ちは強い。
- ・子どもたちの前向きな感覚を復興に取り入れたらよいのではないか？
- ・子ども向け広報等、子どもたちとふるさとなみえとの絆や繋がりを保っていく取り組みが必要ではないか？
- ・復興のための取り組みや、復興検討委員会の様子等、具体的な復興への動きを子どもたちにも見せる必要があるのではないか？

住環境

- ・復興公営住宅の記載は、まちの姿やそこで暮らすことのイメージができるような記載にすべきではないか？
→復興住宅“街”という形で検討すべきではないか？(5,000人程度の規模を想定)
→国の責任で早く整備するべきである。
- ・仮設での生活は限界である。早急に復興公営住宅についての議論を始めるべき。
→一日でも早く復興公営住宅・復興住宅にシフトしていくべき。

賠償

- ・賠償(特に財物)について大きな不安がある。
- ・除染と賠償が両立できるのか？除染に多額の費用がかかり、しっかりとした生活の保障がされるのか不安。
- ・東電や国にはしっかりと対応してもらいたい。そのためにも町ではもっと強く要求する姿勢を見せていくべきではないか？